



— 大学・一般の部 —

「王道を行く」

常楽みちるさん

推し本:『喜嶋先生の静かな世界
The Silent World of Dr.Kishima』

著:森博嗣

推したい相手:かつて勉強をしていた、そして今は
しなくなってしまった全ての人



「王道を行く」 常楽みちる

「意味のわからないものに直面したとき、それを意味のわかるものに変えていくプロセス、それはとても楽しかった。(……)つまり、考えて考えて考え抜いたことに対して、神様が褒めてくれる、そのプレゼントが『閃き』というものなのだと信じた。」私はこの本を、かつて勉強をしていた、そして今はしなくなってしまった全ての人に推したい。なぜなら、読み終わったとき、不思議と勉強したくてしたくてたまらなくなってくるからだ。主人公はとある理系学部の大学生。一風変わった「喜嶋先生」との出会いによって人生を大きく変えていくこととなる。この物語では「学ぶこと」の過程がつぶさに描かれている。はじめ、大学に入学したばかりの主人公は、思い描いていた授業とのギャップにショックを受ける。なぜなら、周囲は「高校からの延長として惰性で授業を聴いていた。まるでテレビを見るように、ぼんやりと授業を受けていたのだ。休講になるとみんなが大喜びする。誰も、勉強なんてしたくない、と思って」いたからだ。しかし、大学三年生になって興味のある分野に進み、彼は「研究」と、そして喜嶋先生と出会うことになる。最初はある領域の中で与えられたテーマに沿って実験をし、得られた結果を論文にする。しかし、さらに研究が進むと、次第に自分でテーマを見つけなくてはならなくなる。テーマを見つけることが一番難しく、一番重要なことなのだと主人公は気づく。喜嶋先生は、研究についてこう語る。「既にあるものを知ること、理解すること、研究ではない。研究とは、今はないものを知ること、理解することだ。それを実現するための手がかりは、自分の発想しかない」そして物語の後半、主人公は些細なきっかけによって、喜嶋先生とともに学問上の新たな発見をすることになる。その場面は、理系の学問のことなんて何も分からなくても感動的だ。この本の主人公は、学ぶことを通じてある種の「人生の捉え方」のようなものを得ていく。学ぶこととは自分の中に確固たるテリトリーを作ること、この先何があっても「大丈夫」な部分を広げていくこと。そして、そこを足場にすれば、きつともっと遠くに行ける。主人公は勉強の過程をこう表現している。「遠くが見えるようになって初めて、遠くがあることを

知る。そして、もっと遠くがあることが予想できるのだ。」彼にとって研究は、ただ文献を読むことや計算することだけではない、自分をうちから押し広げ、人と繋がり、深淵に触れる行為なのだ。そんな経験はもちろん簡単には得られないだろう。でも、「学ぶこと」そのものについては、いつでも、誰にでもチャンスがある。最近、大人になってから勉強の魅力に気づく、という体験をするようになった。暗記が嫌いで、高校生のときにテストで0点を取ったこともある世界史の本を読んでもたら、こんなにも面白かったのか、とびっくりした。ミクロでみればあんなにもばらばらで複雑な出来事にも因果関係があって、互いが干渉し合い、大きな流れを生み出して、それが現在へと繋がっている。それは、一つひとつの出来事を追うだけだった昔の自分には気づけないことだった。もちろん、細部まで暗記する必要に駆られていないから面白いのだということもあるけれど、大人になった今だから、色々なことを俯瞰できるようになっていて、それが「面白い」と感じられる心に繋がったのだと感じる。昔は何の印象にも残っていなかった小説がふと読み返したらすごく面白かったり、線が荒くて色も暗い絵画の美しさが分かるようになったり。それは人生のプロセスに直結している。そして、学ぶことは、そんな体験をより豊かにしてくれる。喜嶋先生は「学問には王道しかない」と言う。この場合の王道とは、近道という意味ではなく、正しい道、真っ直ぐな道という意味だ。主人公はこう回想する。「どちらへ進むべきか迷ったときには、いつも『どちらが王道か』と僕は考えた。それはおおむね、歩くのが難しい方、抵抗が強い方、厳しく辛い道の方だった。困難な方を選んでおけば、絶対に後悔することがない、と言うことを喜嶋先生は教えてくれたのだ。」学びの世界はひどく静かだ。それは時には孤独、と形容できるかもしれない。でも恐ろしかったり寂しかったりする静けさや孤独ではない、この本を読めばそのことがよく分かる。何かを突き詰めていけば、結局は難しい方、壁の高い方を選ぶことが「王道」になる——私たちはそれをどこかで理解している。理解していても常にそれを選ぶことは至難の業だ。けれど、『喜嶋先生の静かな世界』は、そんな王道を少しでも選んでみたいと思わせてくれる。何かを突き詰めることでしか見えないような世界を、垣間見せてくれる。そんな物語だ。